

令和元年6月18日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03396

研究課題名(和文)近代イギリス女性作家たちの言語態と他者 - 感受性、制度、植民地

研究課題名(英文) The Textual Configuration of Modern British Women Authors and Otherness: Sensibility, Institutionalisation, and Colonies

研究代表者

小川 公代 (Ogawa, Kimiyo)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：50407376

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：フランス革命や急進主義が群衆心理や暴力、人間の内省にもつながる感受性、メソジズムの感覚的経験など、18、19世紀イギリス文学と感受性言説についてはこれまで多くの研究がなされてきた。本研究は、これまで多様な視点から研究されてきた感受性言説を当時の女性作家がどう意識し、植民地支配が制度化されていくプロセスに参入していったかに主眼をおいた。医科学書においてどのように女性の身体や動物が表象されているか、文学作品において植民地主義や奴隷がどのように描かれているか、また宗教やチャリティという概念がどう結びつくかを丹念に調査し、感受性の言語態の研究成果とすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、18世紀末から19世紀前半にかけての感受性言説の変遷と社会的意義を、教育や慈善や科学の制度整備が進み、帝国が拡張する文脈のなかで検証することで、国内外でも未解明なこの課題について研究成果をあげることができた。また、海外の研究者を複数名日本に招聘し、植民地支配の歴史や小説をテーマとした講演、シンポジウム、イベントなどを開催し、研究者のみならず一般参加者にもその成果を共有することができた。たとえば、東京大学と共催で開催した "Romantic Regenerations" 国際学会や、世界規模で連携した "Frankenreads" の一環として開催した国際シンポジウムなどである。

研究成果の概要(英文)：In recent years, the theme of eighteenth- and nineteenth-century literature and its relation to the language of sensibility has increasingly become popular among researchers. Among these studies, one has focused on radical politics and mob psychology during and the aftermath of the French Revolution and another looked at the cult of sensibility endorsed by Methodism. The originality of our project lies in the meticulous research on the language of sensibility from the point of view of female writers, and how they actively involved themselves in the process of the institutionalization of colonialism, thereby challenging its authoritative voice. We looked at how these women critically represented colonialism, slavery, the female body and animals in their literary texts. We also investigated the way in which the concepts of religion or charity were deployed in the language of sensibility.

研究分野：英文学

キーワード：感受性 イギリス文学 植民地主義 教育制度 医科学言説

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

過去の共同研究では、繊細な身体感覚を生々しく描写するポルノグラフィ的な感受性言語は、実は教育的な感受性言語と二律背反の関係にあり、女性作家たちの言説は感受性言語の不道徳性を修辭的に浄化して道徳価値を高めることで、自らの言語態の社会意義を正当化しようとしていることを確認した。

共同研究の複数の事例が示唆したのは、感受性言語が道徳的二律相反性を抱えながらも社会道徳的価値を強調する傾向を19世紀初頭でも持続したことである。本研究は、この過程のとりわけ文学作品の聖典化の文脈においていかに感受性言語が教育的価値を増大させていったかを探るために着手した背景がある。また、18世紀末から19世紀前半にかけての感受性言語の変遷と社会的意義を、教育や慈善や科学の制度整備が進み、帝国が拡張する文脈のなかで検証する必要を認識し、国内外でも未解明なこの課題について研究成果をあげることも射程に入れた。

### 2. 研究の目的

本研究は、感受性言語の矛盾を女性作家がどう意識し、社会的正当化を試みたかを、18世紀末から19世紀前半における教育や慈善、科学、文学、植民地支配が制度化されていく文脈で検証することを目的とした。

### 3. 研究の方法

18世紀後半から19世紀初頭のイギリス女性作家たちの教育的言説における不道徳な感受性の「制御」を試みる言語的構造を、教育や慈善、科学、文学、植民地支配の制度化が進展する文脈に視野を広げ、教育史・社会文化史からの観点も取り入れ、ジェンダー問題として考察する。研究会開催は年3回行い、情報や知見の共有を行った。国内で入手不可能な資料については夏期・春期休暇中に分担調査を実施。研究成果は国内外の学会発表や学術誌への投稿、図書刊行を通して公表をし、最終年度に主催したシンポジウムの発表内容は冊子としてまとめ、関係する分野の研究者に配布した。

### 4. 研究成果

本研究は、これまで研究されてきた感受性言語を当時の女性作家がどう意識し、また植民地支配が制度化されていくプロセスにどのように参入していったかに主眼をおいた。不道徳で猥らな感受性言語への批判があるなか、女性たちは教育、医学・科学、動物愛護やチャリティ、植民地問題といった領域で感受性を言語化した。彼女らが道徳性や社会的意義の認知を目指した過程に着目しつつ、その言語態がいかに「文学」という概念の変容と連動していたか、また、「共感」に基づいた子供や動物、貧民や奴隷たちの表象や擁護が、どのように女性言語の解放と結びついていたかを確認することができた。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

川津雅江、「ローストビーフと菜食主義 イギリス・ロマン主義時代の食の政治と倫理」、『人文科学論集』、査読有、第98号、2019年、39-50頁。DOI: 10.15040/00000352

Kimiyo Ogawa, "Queer Genius and the Discourse of the Spiritual in Britain: Virginia Woolf's *Orlando* (1928)", 『上智ヨーロッパ研究』、査読無、第10巻(特集:「ヨーロッパのセクシュアリティと親密圏」(編集))2018年、21-45頁。

大石和欣、「ヴィクトリア朝の南方熊楠 コスモポリタンの知性の巡礼」『ヴィクトリア朝文化研究』、査読有、第16号、2018年、49-66頁。

大石和欣、「Composed upon the Millennium Bridge - 七色の朝霧」『午前四時のブルー』、査読無、第2号、2018年、39-47頁。

川津雅江、「貧者のレシピ—ハナ・モア、チャリティ、環境」名古屋大学英文学会『IVY』、査読有、第50巻、2017年、1-26頁。

土井良子、「パロディ、バイタリティ、ファンタジー—オースティンの習作「小説」試論」、『ジェイン・オースティン研究』、査読無、第11号、2017年、1-29頁。

Kimiyo Ogawa, "'Roaming fancy' and Imagination: Gothic Force in Austen's *Northanger Abbey* and Keats's *Isabella*" 『英文学研究』、査読有、第92巻、2016年、23-39頁。

Kimiyo Ogawa, "The Irish Question and Troubled Religious Faith: Sheridan Le Fanu's *In a Glass Darkly*" 『上智ヨーロッパ研究』、査読無、第8巻、2016年、19-42頁。

Kaz Oishi, "Hope and a Romantic Poet: Well-Being and Education in Early-Nineteenth-Century Britain" *The 4th World Humanities Forum: The Humanities of Hope, Program Handbook*, 査読無、2016, 833-46.

Yuri Yoshino, "Maria Edgeworth's Representation of India: The British Empire and Sympathy in

‘Lame Jervas’ (1804),” 『ジェイン・オースティン研究』、査読無、第 10 巻、2016 年、115-27 頁。

原田範行、「ギヤスケルの『ジョンソン』 言語、語り、出版文化」、『ギヤスケル論集』、査読有、第 26 号、2016 年、1-14 頁。

Ryoko Doi, “Troublesome Women and the Trouble of Womanhood in Jane Austen’s *Juvenilia*,” 『ジェイン・オースティン研究』、査読無、第 10 号、2016 年、129-35 頁。

〔学会発表〕(計 31 件)

Noriyuki Harada, (シンポジウム) “Orality, Writing, and Print Culture in the Eighteenth-Century England with Special Reference to Samuel Richardson and Samuel Johnson,” シンポジウム “Writing Style: Samuel Johnson, Hugh Blair, Herbert Spencer, and Walter Pater” における発表、2019 年 2 月 8 日、(於：東京女子大学)

Kimiyo Ogawa, (招待講演) “Mary Wollstonecraft and Mary Shelley: The Body and Soul Debate,” The 47<sup>th</sup> Wordsworth Summer Conference, Wordsworth Conference Foundation, 2018 年 8 月 14 日 (於：Rydal Hall, UK)

小川公代、(シンポジウム) 「オスカー・ワイルドとコナン・ドイルの実験—身体とスピリチュアリティ」, シンポジウム「ワイルドとコナン」, 日本ワイルド協会第 43 回大会、2018 年 12 月 8 日 (於：青山学院大学青山キャンパス)

小川公代、(シンポジウム) 「20 世紀心理学理論からみた『ノーサンガー・アビー』の革新性」, 日本オースティン協会第 12 回大会シンポジウム「<始まり>としての *Northanger Abbey*」, 2018 年 6 月 30 日 (於：大妻女子大学)

川津雅江、(シンポジウム) 「女性のナチュラル・ヒストリー—ウルストンクラフトと教育」, イギリス・ロマン派学会第 44 回大会シンポジウム「ロマン主義とナチュラル・ヒストリー—越境する精神」, 2018 年 10 月 20 日 (於：兵庫県立大学)

大石和欣、(シンポジウム) “The Aesthetics of Weeds: A Case in Nishiwaki Junzaburō,” “The Aesthetics of Imperfection,” 第 69 回美学会全国大会、2018 年 10 月 8 日 (於：関西大学)

Yuri Yoshino, “Sensibility and Slavery: The Impact of ‘The Grateful Negro’ by Maria Edgeworth,” The International Association for the Study of Irish Literatures (IASIL) 2018 Conference, 2018 年 7 月 26 日 (於：Radboud University, Netherlands)

吉野由利、(招待シンポジウム) “Stories for the Children of the Empire: Maria Edgeworth’s *Popular Tales* (1804),” IASIL Japan 第 35 回国際大会シンポジウム “Cultivating Stories: Children’s Fiction in Ireland,” 2018 年 10 月 14 日 (於：東洋大学)

Yuri Yoshino, “Maria Edgeworth’s Readerly Strategies and Social Vision: *Popular Tales* and *Patronage*,” ME250 Conference (マライア・エッジワース生誕 250 周年記念学会), 2018 年 12 月 8 日 (於：Trinity College Dublin, Republic of Ireland)

原田範行、「文学のへそまがり—18 世紀イギリスを舞台にして」, 日本英文学会第 90 回大会特別シンポジウム「『文化』を考える—日本英文学会における文化研究の可能性」における司会・講師、2018 年 5 月 20 日、(於：東京女子大学)

土井良子、(シンポジウム) “‘But history, real solemn history, I cannot be interested in.’: 歴史を読む/書くジェイン・オースティン」, 日本オースティン協会第 12 回大会シンポジウム「<始まり>としての *Northanger Abbey*」, 2018 年 6 月 30 日 (於：大妻女子大学)

小川公代、(シンポジウム) 「ロマン主義文学における「科学的」人種論」(日本英文学会全国大会シンポジウム「身体・人種・人間—英語圏文学の人類学的転回」)、2017 年 5 月 20 日、於：静岡大学)

川津雅江、(招待講演) 「貧者のレシピ—イギリス・ロマン主義時代の女性、チャリティ、環境」, 名古屋大学英文学会第 56 回大会、2017 年 4 月 15 日 (於：名古屋大学)

川津雅江、(シンポジウム) 「ローストビーフを食べる—ロマン主義時代の食の政治と倫理」, 日本英文学会中部支部第 69 回大会、2017 年 10 月 28 日 (於：福井大学文京キャンパス)

大石和欣、(ワークショップ) 「富とチャリティと病院—ジョージアン・ダブリンの建築物と都市開発」都市史学会主催ワークショップ「ジョージアン・ダブリンの都市空間—都市史的観点から」, 2017 年 12 月 25 日 (東京大学工学部)

原田範行、(招待講演) 「『ガリヴァー旅行記』の世界—視覚表象・諷刺・多義性」奈良女子大学言語文化学科欧米言文講演会、2017 年 5 月 30 日 (於：奈良女子大学)

原田範行、「実作者オースティンの誘惑—文体、描写、へそまがり」, 日本オースティン協会第 11 回大会シンポジウム「教室のジェイン・オースティン」における講師、2017 年 6 月 24 日 (於：摂南大学)

原田範行、「新しい教養教育の展開」(IDE 大学セミナーにおける特別講演、2017 年 8 月 28 日、於：札幌ガーデンパレス)。

- 原田範行、「ポカホンタスとイギリス近代」、日本アメリカ文学会東京支部例会シンポジウム「ポカホンタスの400年 環大西洋文学史を再考する」における講師、2017年12月9日（於：慶應義塾大学）。
- 小川公代、(招待講演)「フランケンシュタインとイギリス社会」大東文化大学英米文学科主催・秋季英文学会、2016年12月9日（於：大東文化大学）
- 21 Kimiyo Ogawa, (招待シンポジウム)“Radical Walking in Coleridge’s and Thelwall’s Poems”、イギリス・ロマン派学会、2016年10月30日（於：神戸市外国語大学）
- 22 Kimiyo Ogawa, “John Thelwall’s “spots of time” in *The Daughter of Adoption*, Wordsworth Summer Conference, 2016.8.16, (於：Rydal Hall, UK)
- 23 川津雅江、(学会発表)「バーボールドのネズミと動物愛護」、イギリス・ロマン派学会第42回全国大会、2016年10月30日（於：神戸市外国語大学）
- 24 大石和欣、(招待発表)“Hope and a Romantic Poet: Well-Being and Education in Early-Nineteenth-Century Britain,” *The 4th World Humanities Forum: The Humanities of Hope*, 2016年10月29日（於：亜州大学、韓国）
- 25 大石和欣、(招待発表)“Keats, Pre-Raphaelites, and Japanese Aesthetes,” NTU-UTokyo Joint Conference, 2016年12月1日（於：国立台湾大学、台湾）
- 26 大石和欣、“Humanities and Education in the Context of Globalized Economy in the Early Nineteenth Century,” The 3rd History of Consumer Culture Conference, 2017年3月23日（於：学習院大学）
- 27 吉野由利、(招待講演)「英文学の正典と受容 文学観光の事例から」、一橋大学社会科学古典資料センター第36回西洋社会科学古典資料講習会、2016年11月18日（於：一橋大学）
- 28 吉野由利、(招待シンポジウム)「19世紀英国とアイルランドの文学観光—Austen と Edgeworthを中心に」、日本英文学会第88回大会シンポジウム第二部門「近代英国と Literary Tourism—多様な文学受容と文化的アイデンティティの視点から」、2016年5月28日（於：京都大学）
- 29 原田範行、「子どもの誕生とフィクションの変容 ディケンズにみる18世紀作家の方法的懐疑のゆくえ」、2016年度ディケンズ・フェロウシップ総会シンポジウム「ディケンズと18世紀」における講師、2016年10月8日（於：中央大学）
- 30 原田範行、「シェイクスピアの近代 テクスト、制度、想像力」第55回日本シェイクスピア学会セミナー「先人たちはシェイクスピアをどう読んできたのか」における講師、2016年10月9日、（於：慶應義塾大学）
- 31 原田範行、「教室の英文学」という方法論（日本英文学会第13回関東支部大会シンポジウム「教室の英文学を考える」における司会・講師、2016年11月12日、於：フェリス学院大学）

〔図書〕(計16件)

- 小川公代他、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』中央大学人文科学研究所編、中央大学出版部、2018年、444(147-75)。
- 原田範行、川津雅江他、『十八世紀イギリス文学研究(第6号) 旅、ジェンダー、間テクスト性』日本ジョンソン協会編、開拓社、2018年、260(2-22、93-109)。
- 原田範行他、『ローレンス・スターンの世界』坂本武編、開文社出版、2018年、381(212-31)。
- 大石和欣他、『現代イギリス小説の「今」 記憶と歴史』河内恵子編、彩流社、2018年、310(149-92)。
- 小川公代他、『文学とアダプテーション ヨーロッパの文化的変容』小川公代、村田真一、吉村和明共編、春風社、2017年、370(13-31、285-314)。
- 小川公代、川津雅江他、『ジェイン・オースティン研究の今』日本オースティン協会編、彩流社、2017年、397(301-18、319-35)。
- 小川公代他、『教室の英文学』日本英文学会(関東支部)編、研究社、2017年、334(301-18)。
- 原田範行他、『英国小説研究』第26号、英宝社、2017年、160(5-31)。
- 原田範行他、『文学都市ダブリン ゆかりの文学者たち』木村正俊編、春風社、2017年、448(27-44)。
- Noriyuki Harada, et al., “Literature, London, and *Lives of the English Poets*,” *London and Literature, 1603-1901*, ed. Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport, and Yui Nakatsuma (Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2017), 161(65-78)。
- 小川公代他、『幻想と怪奇の英文学 2 増殖進化編』東雅夫、下楠昌哉編、春風社、2016年、478(78-98)。
- 川津雅江他、『増殖するフランケンシュタイン 批評とアダプテーション』武田悠一、武田美保子編、彩流社、2017年、356(27-58)。

大石和欣、『竹山道雄セレクションⅣ』藤原書店、2017年、616(595-607)。  
吉野由利他、『第36回西洋社会科学古典資料講習会テキスト』一橋大学社会科学古典資料センター編、一橋大学社会科学古典資料センター、2016年、38(35-38)。  
[http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/images/text\\_36.pdf](http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/education/images/text_36.pdf)  
原田範行、『風刺文学の白眉「ガリバー旅行記」とその時代』NHK出版、2016年。  
原田範行他、『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』田中孝信、要田圭司、原田範行編著、彩流社、2016年、412(261-91)。

〔その他〕(計15件)

小川公代、(翻訳)『エアスイミング』、幻戯書房、2018年、157頁。  
小川公代、(評論)「現代の怪物とは何者か?—2018年に『フランケンシュタイン』を読む」『文學界』7月号、文芸春秋、2018年、292-93頁。  
川津雅江、(プロシーディングス)「ローストビーフを食べる—ロマン主義時代の食の政治と倫理」、『日本英文学会中部支部第69回大会プロシーディングズ』、日本英文学会、2018年、203-04頁。  
原田範行、「海外文学二〇一七年—イギリス文学」、『文藝年鑑』日本文藝家協会編、新潮社、2018年、66-68頁。  
原田範行、「英文学会はおもしろい! 日本英文学会の魅力と新時代への可能性」、『週刊読書人』2018年5月18日号(第3239号)読書人、2018年、4頁。  
原田範行、「ポカホンタスとイギリス近代」、『アメリカ文学』(日本アメリカ文学会東京支部会報)第79号、日本アメリカ文学会東京支部、2018年、31-38頁。  
土井良子、(書評) Juliet McMaster, *Jane Austen, Young Author*, 『ジェイン・オースティン研究』第12号、2018年、41-45頁。  
土井良子、(書評)ヘンリー・フィールディング『アミーリア』三谷法雄訳、ヘンリー・フィールディング『ミセラニーズ—詩とエッセイ』—ノ谷清美訳、『日本18世紀学会年報』第33号、2018年、69-70頁。  
土井良子、(書評) Abigail Williams, *The Social Life of Books: Reading Together in the Eighteenth-Century Home*, 『日本ジョンソン協会年報』第42号、2018年、28-29頁。  
小川公代、「ロマン主義文学における「科学的」人種論と宗教」、『日本英文学会第89回大会 Proceedings』第89巻、2017年、71-72頁。  
Masae Kawatsu, (書評) Devoney Looser, ed., *Cambridge Companion to Women's Writing in the Romantic Period, Studies in English Literature*, English Number 59, March 2018, pp. 79-85.  
原田範行、「海外文学二〇一六年 イギリス文学」、『文藝年鑑』日本文藝家協会編、新潮社、2017年、66-68頁。  
原田範行、「海外交流と異種混淆が輝く舞台 ポカホンタス、八雲、カズオ・イシグロ」、『図書新聞』2017年12月23日号(第3332号) 6頁。  
Masae Kawatsu, (書評) Dewy W. Hall, *Romantic Naturalists, Early Environmentalists: An Ecocritical Study, 1789-1912*, 『日本ジョンソン協会年報』第40号、2016年、23-24頁。  
原田範行、「海外文学二〇一五年 イギリス文学」、『文藝年鑑』日本文藝家協会編、新潮社、2016年、66-68頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：川津 雅江  
ローマ字氏名：KAWATSU, Masae  
所属研究機関名：名古屋経済大学  
部局名：法学部  
職名：名誉教授  
研究者番号(8桁)：30278387

研究分担者氏名：大石 和欣  
ローマ字氏名：OISHI, Kazuyoshi  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：50348380

研究分担者氏名：吉野 由利

ローマ字氏名：YOSHINO, Yuri  
所属研究機関名：学習院大学  
部局名：文学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：70377050

研究分担者氏名：土井 良子  
ローマ字氏名：DOI, Ryoko  
所属研究機関名：白百合女子大学  
部局名：文学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：80338566

研究分担者氏名：原田 範行  
ローマ字氏名：HARADA, Noriyuki  
所属研究機関名：東京女子大学  
部局名：現代教養部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：90265778

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。